

大江健三郎「ピンチランナー調書」論 ——三島由紀夫「美しい星」のパロディとして読む——

楽原文和

1 読者を戸惑わせる「宇宙的意志」と「転換」

本論文で取り上げる大江健三郎の長編小説「ピンチランナー調書」(1976年)⁽¹⁾はこの後述べるように、彼の他の長編小説に比べると文芸ジャーナリズムでの批評でも、文学研究での論文でも取り上げられることが少ない小説である。もちろん、大江健三郎が半世紀以上の間に発表した小説の中には繰り返し取り上げられるものとそうではないものがあるのは当然なのだが、この小説は「万延元年のフットボール」(1967年)、「洪水はわが魂に及び」(1973年)、「同時代ゲーム」(1979年)といった、取り上げられることの多い長編小説の間で発表されながら等閑視されてきたものの一つである。

その理由の一つは次のようなこの小説の設定・ストーリーにあるのかもしれない。語り手である作中で「森・父」と呼ばれる38歳の人物は、8歳の息子の森と「転換」し、後者が28歳に前者が18歳にとちょうど20歳ずつ年齢を交換することになる。彼らを「転換」させたのは「宇宙的な超越者」であり、その「宇宙的な意志」の与えた「使命」に従って彼らは行動する。その「使命」とは東京都下に作らせた核爆弾によって「天皇ファミリー」を巻きこんだ権力を目指していると思われる、メディア上で「大物A氏」と呼ばれる「森・父」の長い間の支援者を打倒することである。小説の結末で森と「森・父」は「大物A氏」と病院で対面し、彼が実際は怪物ではなく一人の老人に過ぎないことを認めた上で森が「大物A氏」を撲殺する。「宇宙的な意志」からの「使命」を果たした森は病院の外で燃え上がる山車に飛びこみ、(本文中には書かれていないがおそらく)焼死する。

純文学を担うものとされていた当時の文芸雑誌に連載されていた小説では、一晩で人間が若返ったり成長したり、「宇宙的な超越者」からの「使命」を帯びて行動したりする人物が登場したりすることはなかった。もちろん、SF雑誌やテレビの

特撮ドラマ・アニメーションでは珍しくない設定ではあるが、当時はまだジャンルによる内容の区別が有効だったわけで、そのフィクションの度合いに基づく境界線を越境した小説として読者を戸惑わせてしまったと考えられる。もっとも、「ピンチランナー調書」では、そういったフィクションの度合いを調整するために、「転換」にしても「使命」にしても「森・父」が大江健三郎本人を思わせる小説家「僕」に送ってきた文章やテープの中だけに出て来るようにしてある。つまり、実際にあったことではなく彼の想像・妄想の産物であるという解釈も可能なのであり、そう捉えれば当時の文芸雑誌に掲載されていてもおかしくないことになる。

その一方で、その設定が別の難しさ・わかりにくさをこの小説に与えているということもある。第一章は小説家「僕」が語り手だが、章の最後に「森・父」から「僕」に送られた手紙が引用され、「森・父」からの依頼で「僕」が「^{ゴースト・ライター}幻の書き手」を引き受けることが記述され、実際第二章から最後の第十二章までは「森・父」が語り手となる。この語り方についての転換だけでも初読者を戸惑わせるだろうが、さらに「^{ゴースト・ライター}幻の書き手」は「^{ゴースト}幻」にとどまらず、「森・父」の書く内容や書き方、それにテープに録音された音声の文章への変換について解説したりして、さらにこの小説を複雑にしている。

ただ、そのおかげで「僕」が、「森・父」の伝える内容を現実と思いきまず、距離を取っていることが読者には伝わるわけだが、これもSFのような設定を文芸雑誌の小説で用いていることからもたらされた複雑さということになるだろう。

本論では、「宇宙的意志」によって「転換」させられた父子が「使命」に従って行動するという、読者を戸惑わせてきた「ピンチランナー調書」のストーリーがどのようなところからもたらされたものなのか、それによってどのような批評性を持つことになったのかを論じる。それはこの小説単独で明らかにできるものではないと考え、大江健三郎と緊張した関係とその死後も保ち続けた三島由紀夫やその小説「美しい星」(1962年)との関係から見ていく。特に「転換」という突飛な現象が導入された理由は「美しい星」と関連づけないと説明できないのである。

本論の構成は以下の通りである。まず「ピンチランナー調書」に対する従来の評価を紹介し、そこに抜け落ちていた観点を指摘し、それを補う先行者として「美しい星」を解説し、また比較する。さらに二つの小説の関係性の背景となる大江健三

郎と三島由紀夫との間にあった緊張関係や共通の世界認識について説明した上で、それだけでは説明できない「転換」というアイデアの出处を「美しい星」に求めていく。まずその前提として三島由紀夫の大江健三郎の小説に対する批判が「大物A氏」の造形と繋っていること、三島由紀夫が晩年に繰り返し言及するようになった「天皇」の「連続性」を批判することが「転換」導入の目的であったこと、そして「ピンチランナー調書」が、「美しい星」が持っていたのに十分に展開されていない可能性を展開させた小説であることを指摘して結論とする。

2 「ピンチランナー調書」の評価と「美しい星」との比較

大江健三郎が残した様々な小説のうち、毀誉褒貶の激しかった小説は複数あるが「ピンチランナー調書」もその一つである。低評価については、その後刊行された長編評論「小説の方法」（1978年）や長編小説「同時代ゲーム」（1979年）と組み合わせられたものであり、いずれもがそのわかりにくさ・晦渋さが批判の対象となっていた。ただ、「小説の方法」は後に「小説のたくらみ、知の楽しみ」（1985年）や「新しい小説のために」（1988年）として、また「同時代ゲーム」は「M/Tと森のフシギの物語」（1986年）として、新たによりわかりやすく書き直された。また1980年代書かれた短編小説群や長編小説「懐かしい年への手紙」（1987年）以降の仕事に繋っていくものとして、それらの小説との関係で言及される機会が多い。それに対して、「ピンチランナー調書」一つが論じられることが少ないまま取り残されているというのが現状である。

「ピンチランナー調書」についての発表当時の評価としては、たとえば文芸雑誌の「今年の収穫」⁽²⁾というアンケート企画では加賀乙彦、渡辺広士、いいだ・もも、中野孝次、菅野昭正、小田切進、佐江衆一、松原新一の8名が「本年度（昭和50年11月より昭和51年10月まで）に発表された文学作品（小説・評論・戯曲・詩を問わず）のうち、読まれたもののなかで最良と思われるもの三篇をお選びください」という質問に対して「ピンチランナー調書」を挙げており（なお回答者は小説家・詩人・評論家など58名）、最も多く名前が挙がっている藤枝静男「田紳有楽」と三浦哲郎「拳銃と十五の短篇」の9名に次いで肯定的な評価が与えられていることになる。

ただ、その一方で「大江健三郎『ピンチランナー調書』はあられもない妄想譚であった。大江はこの妄想譚を小説の構造としては空しいまでの努力と工夫と注意深さで支えている」⁽³⁾、「数ある大江健三郎の小説のなかでも、「ピンチランナー調書」はきわめて読みにくい」⁽⁴⁾という評がある。「今年の収穫」の一つに挙げていた小説家の加賀乙彦も別の鼎談では「作者の意図どおりに読者が感応したかどうか、これは今日いろいろ議論があるところでしょう」、「不快な不意打ちではないですけども、突然迷路のなかに投げ込まれて、出口がなくなっちゃったような感じですね」というように、読者を戸惑わせる小説であることを述べている⁽⁵⁾。

その後、「ピンチランナー調書」が取り上げられる際の観点には次のようなものがある。「個人的な体験」以来の大江健三郎自身の身に起こった知的障害を持った息子大江光との関係をモチーフとした小説としてとらえるもの⁽⁶⁾、「森・父」が原子力関係の技師であり、「大物A氏」が東京で核爆弾を作る陰謀を巡らせていることから、大江健三郎が「ヒロシマノート」(1964年)以来の評論で繰り返して取り上げている冷戦下での核の問題と関連づけて論じるもの⁽⁷⁾、さらに、同時期の大江健三郎のエッセイ・評論と関連づけて「祈り」や「トリックスター」をキーワードに読み解こうとするものがある⁽⁸⁾。

それらの論はこの小説の題材・テーマを取り上げているのではあるが、「転換」した者たちが「宇宙的意志」からの「使命」に基づいて「大物A氏」を打倒するという設定・ストーリーを説明できてはいない。そのためにはこの小説が引用し、パロディ元とした小説をふまえる必要がある。それは三島由紀夫が「ピンチランナー調書」と同じ『新潮』に1962年に連載していた「美しい星」⁽⁹⁾である。

「美しい星」の主要人物である大杉一家は全員が太陽系内の他の星からやってきた宇宙人であると自分たちのことを考え、地球人類を核戦争による自滅から救い出そうと啓発活動をしている。一方、自分たちを太陽系外、「白鳥座六十一番星あたりの未知の惑星」から来たと考えている羽黒真澄たちは、愚かな人類は滅ぶべきと考えている。小説の終盤で大杉一家のリーダー重一郎は、白鳥座星人たちの人類に対する毒々しい悪意に圧倒され、また末期の癌であることを知らされ死の恐怖に怯えることになる。彼ら一家の窮地を救うかのように空飛ぶ円盤が現れるというのがこの小説の結末である。

このように現代の地球上に「宇宙」の存在が影響を及ぼそうとする、というのが二つの小説の共通点なのだが、まずは主要登場人物、「森・父」と大杉重一郎と「宇宙」との関係が語られている箇所を引用し比較してみる。

おれは「転換」を自覚した直後から、ひとつの固定観念を獲得していてね。それはこんなヴィジョンなのさ。宇宙的な超越者がU F Oでやってきて、地球上の一地点に幻燈機を向けている。ひとつの光源が、ふたつの影を立体スクリーンに映し出す。そのような構造が設定される時、A投影図とB投影図に二十年ずつあいおぎなう「転換」をさせることは、幻燈機の箱の操作としてどうして困難だろう？

おれと森との「転換」がそのようにして実現されたのであるならば、超越者に或る意図があって当然であり、おれと森との側からいうならそれは、使命を担わしめられたことになろうじゃないか？（「ピンチランナー調書」第四章 1）

「ピンチランナー調書」の「森・父」は自身が「転換」を経験したことに基づいて、自身と息子の森が「宇宙的な超越者」によって「映し出」された「影」であると想像し、その「超越者」から「使命」を与えられたと考えている。その使命とは、先述したように東京で核爆弾を作らせることで権力を握ろうとする「大物A氏」を打倒するということである。

「四時半から五時までの間に、南の空に現はれるといふんだから」と重一郎は眼鏡の目をその方角から離さずに喋りつづけた。「あと十分もすれば、いよいよその時刻が来る。

ああ、兄弟達は何を知らせにやって来るのだらう。どんな神秘を伝へに来るのだらう。

ソ聯はたうとう五十メガトンの核実験をやってしまった。彼らは宇宙の調和を乱す怖ろしい罪を犯さうとしてゐる。この上、もしアメリカがその罅みに倣へば、……もはや地球の人類の終末は目に見えてゐる。それを救ふのこそわれ

われ一族の使命なのに、何とまだわれわれは非力で、世間は安閑としてゐることだらう！」（「美しい星」第一章）

一方の「美しい星」の大杉重一郎は自分を地球人ではなく火星だと考えている点で、あくまでも「使命」を与えられた「影」であり、地球人である「森・父」とは立場が異なる。彼は、自分たちを滅ぼすような核兵器を作り出した愚かな地球の人類をより上位の存在として導き、救わなければならないと考えており、それぞれ水星人・金星人・木星人である彼の家族との間でそれが「われわれ一族の使命」として共有されている。

つまり、いずれの小説でも、核兵器の開発が続けられている冷戦下の地球で、核の保有・使用を止めさせることを目的としているのである。しかも地球で生れた原子力を危惧した地球外存在の意図を汲んでの行動ということになる。この一致は偶然ではなく、大江健三郎が「美しい星」のテーマやモチーフを読み取り、それを継承し、批評したものとして「ピンチランナー調書」を書いたというのが本論の主張となる。

大江健三郎と三島由紀夫は、前者のデビュー直後から同時代の作家として併走しつつ、異なる立場から小説を書き、社会的発言を続けていた。大江健三郎が核の危機を題材とする「ピンチランナー調書」を書く際に、かつて読んだ同様に核戦争を恐れる人物を登場させた「美しい星」を意識していたことは十分考えられる。実際、両者を比較すると、「ピンチランナー調書」は設定を引き継いでいるだけではなく、「美しい星」が持っていた可能性を開くべく書かれたものとして読めてくるのである。詳しくは次節以降で述べることにする。

3 大江健三郎と三島由紀夫、「ピンチランナー調書」と「美しい星」

大江健三郎と三島由紀夫は、三島由紀夫の生前もお互いを意識し、批評し合う関係だった。三島由紀夫が十歳年長で小説家としてのキャリアも長いため、当初は新人として登場してきた大江健三郎に助言するという関係だった。たとえば、大江健三郎が登場してから1年余り後の、安部公房も交えた座談会「文学者とは」では、「既成文壇について」「文学運動について」「批評家について」といったテーマごと

に三島由紀夫は自身の経験をふまえた発言で大江健三郎に助言をしている¹⁰⁾。しかし、1960年代半ばから両者はライバルとして認められる関係になってくる。

たとえば、1964年7月に両者の対談を企画した文芸雑誌『群像』の編集者は冒頭で「『群像』のアンケート（八月号掲載）の「最も読みたいと思う日本の現存の小説家は誰ですか」という項で去年は大江さんが第一位、今年三島さんが第一位でした」とライバル関係を煽るようなことを述べている¹¹⁾。実際、この対談自体もそれぞれの相容れにくい小説観・社会観をぶつけ合う内容になっている。さらに翌月発表された大江健三郎の長編小説「個人的体験」についての三島由紀夫の批評¹²⁾について、大江健三郎は繰り返し不満を述べている¹³⁾。（これについては4節で詳述する）

そのような緊張関係を保った状態を継続しつつ、1970年11月に三島由紀夫は唐突に自殺する。大江健三郎は死の直後から三島由紀夫について「民主主義を侮辱した」¹⁴⁾、「『美』も、絶対的な天皇制も、かえってかれの表現において、いかにも相対的なものであり、ついには思いつきのものですらあることが明瞭に見えます」¹⁵⁾といった否定的な言及を始めている。これについては既に1972年に刊行された中編集『みずから我が涙をぬぐいたまう日』に収録された「二つの中編をむすぶ作家のノート」に書かれたエピソードを「三島事件の寓意」に見立て、「三島事件の呪縛を、一九七〇年代を通じてもっとも深く被り続けた作家は、ほかならぬ大江健三郎だったのではないか」という笠井潔の指摘がある¹⁶⁾。

また小説の中でも、特に大江健三郎自身を連想させる「O」または「Kちゃん」と呼ばれる作家が登場する小説を書くようになった1980年代以降は、小説の中でも「Mさん」というイニシャル、または「三島由紀夫」という名前を出して、その思想を引き継ぐ集団が登場させたり¹⁷⁾、新聞に掲載された生首の写真に言及し大江健三郎が以前書いた三島由紀夫の死を批判する評論を引用したりしている¹⁸⁾。

さらに小説家「O」が登場しない1970年代に発表された、直接言及していない無関係なような小説にも三島由紀夫を発想源としたものがある。詳しくは次節で述べるが、たとえば「洪水はわが魂に及び」（1973年）では三島由紀夫を連想させる登場人物「縮む男」に若者の集団「自由航海団」を暴力的な方向へ扇動する役割を担わせており¹⁹⁾、大江健三郎にとっては批判すべき、また小説における想像力を刺

激する存在であり続けていたわけである。

以上をふまえた上で、あらためて「美しい星」と「ピンチランナー調書」との共通点から述べていこう。

大岡昇平は、「ピンチランナー調書」の発表直後、既に『「ピンチランナー調書」こそは、この前の『洪水はわが魂に及び』もそうだが核に関する宇宙論的思考が基盤になっているんじゃないでしょうか。人類が核をつくり出し、それを蓄積し爆発させ絶滅してしまうのが宇宙意志であるかどうか、という思考。』と大江健三郎との対談で語っている⁽²⁰⁾。この評が指摘している「基盤」は「ピンチランナー調書」だけではなく、三島由紀夫「美しい星」についてもあてはまる。「美しい星」では、前節で説明したように核兵器を開発してしまった人類が生き延びるに値する存在なのかどうか自身が宇宙人と称する登場人物の間で議論されていた⁽²¹⁾。

先述した大岡昇平が指摘した「核」についての「宇宙論的思考」という「基盤」が二つの小説に共通しているのは、繰り返しになるが偶然ではなく、大江健三郎が「美しい星」を様々に引用し作りかえることで「ピンチランナー調書」という小説に結実させたからではないだろうか。

もちろん、「ピンチランナー調書」の中では「人類の歴史のすべてが」、「宇宙的な意志の気まぐれなプログラム達成の一手段にすぎなかった、という大きい冗談のSF」（第7章 2）としてカート・ヴォネガット Jr.の名前が挙がっており、語り手である「森・父」の（そして大江健三郎の）想像力元にSF小説があったことは明らかである。また、当時放送されていた特撮番組との関係を指摘する先行論も首肯できると考える⁽²²⁾。

ただ、1節の繰り返しになるが、これまで「ピンチランナー調書」における父親と息子の年齢が逆転する「転換」が導入された意味は明快に説明されてこなかった。「転換」について論じる前提として、「ピンチランナー調書」がさらに強く三島由紀夫を意識した小説であることを次節では論じていく。

4 「大物A氏」と三島由紀夫の「個人的体験」批判

大江健三郎が三島由紀夫を自身の小説を書く上で重要な想像力の起源としたのは、これが初めてではない。以前大江健三郎が自衛隊という組織をどのように捉

え、また小説の中でどのように描いていたかを論じた際に、現役の自衛官から戦闘訓練を受ける集団が出て来る小説として「洪水はわが魂に及び」（1973年）を取り上げた²³。この小説は、発表の前年に起った連合赤軍による内ゲバや浅間山荘事件との関連から論じられることが多いが、それよりも1970年に起こった三島由紀夫と彼の率いる楯の会による東京市ヶ谷の自衛隊駐屯地への立て籠もりを意識して書かれている。またこの小説に登場する自由航海団と名乗るグループを追いこんだ「縮む男」と呼ばれる扇動者の造形は三島由紀夫から発想されている。

前節の最後で述べたように、1970年の三島由紀夫の挑発的かつ不可解な死の後、大江健三郎は追いつめられるように彼について繰り返し論じ、彼の影響を受けたものを批判し続けている。その際には三島由紀夫のイメージが過剰に増幅されないように、一人の人間に戻そうと心がけているように読める。「洪水はわが魂に及び」の「縮む男」にしても、自分では突然体が縮み続けていると主張しているものの、本当にそうなのかは明らかではない。若者の集団に紛れこむために自身が社会に不適應になってしまったと嘘をついているのかもしれない男と三島由紀夫を重ねているのも、彼を特別ではない一人の人としての位置に戻すことになるのではないだろうか。

「洪水はわが魂に及び」の三年後に発表された「ピンチランナー調書」もその流れを汲んで書かれていると考えられる。まず、注目したいのは「大物A氏」と森との関係である。「大物A氏」とは「森・父」だけが交渉を持ち、もちろん原子力関連の情報を提供するかわりの金銭的援助によって彼等家族は生活はしているものの、たとえば「転換」前に森と「大物A氏」が直接会ったという話は出てきていない。しかし、実際は彼は森の誕生の際にかかわりを持っている（厳密にはかかわりを持ちそうになったものの不発に終わった）。「第七章 1」において「森・父」が語るところによると、「森が頭蓋骨に欠損をもって生まれた日」、彼を「処置」、すなわち衰弱死させるための「病院」を手配し、そこに行くように「森・父」に「命令した」のが「大物A氏」だったのである。結局、「森・父」はただ「じっと屈して」、「なにひとつ行動せず」森を生き延びさせることになったわけである。

この生まれたばかりの赤んぼうを「殺戮」することを指示するというのは、小説外の世界で、小説の批評としてこれ以前にも行われていた事態を連想させる。すな

わち三島由紀夫による大江健三郎「個人的な体験」への批判である。

三島由紀夫が「個人的な体験」を批判したことについては3節で既にふれているが、この批判の中で繰り返し引用・言及されているのが「私は、この「個人的な体験」のラストでがっかりした」、「暗いシナリオに「明るい結末を与へなくちやいかんよ」と命令する映画会社の重役みたいなものが氏の心に住んでゐるのではあるまいか？ これはもつとも強烈な自由を求めながら、実は主人持ちの文学ではないだらうか？」という箇所である²⁴。「個人的な体験」の中で「鳥」と呼ばれている人物の生まれただけの子どもは障害を持つことが予想され、その子を死なせるかどうかを彼が迷うものの、最終的には生かして育てることを選ぶ。この「結末」を三島由紀夫は否定的に評価しているのだが、ここで注目したいのは評価の基準として「芸術作品としては「性的人間」のあの真実なラストに比べて見劣りがする」と大江健三郎自身の「性的人間」（1962年）を引き合いに出している点である。

「性的人間」の「ラスト」では、それまで習慣的に続けていた痴漢行為を止めて父親の仕事を継ぐことを選んだ「J」と呼ばれている人物が、それを決めた足で電車に乗り痴漢行為をして捕まり、自滅している。三島由紀夫は「一般人の側から絶対に理解不可能な人間、しかも鋭い局部から人間性を代表してゐるやうなものを、言語の苦闘によつて掘り出して来ること」が大江健三郎の仕事であり、「個人的な体験」の「ラスト」はその意味で「真実」ではないと主張しているわけである。ということは、「真実」のために、「鳥」は子どもを「殺戮」して自滅すべきだったということになる。

大江健三郎がこの批評に反発したということも3節で述べたが、「ピンチランナー調書」で森を「殺戮」させようとした「大物A氏」の起源として、(小説外の存在ではあるものの)「個人的な体験」で子どもを「殺戮」させようとした三島由紀夫がいたことになる。「洪水はわが魂に及び」に続いて、三島由紀夫とのつながり、類縁関係を持つ登場人物が再び造形されたことになる。

三島由紀夫と「大物A氏」との類縁関係は他にも指摘できる。「大物A氏」が「宇宙的使命」によって打倒すべき存在とされているのは、対立する「革命党派」の両方に資金援助をして核爆弾を作らせているからと読み取れるのだが、実は三島由紀夫は「いや、彼らなら核兵器だつて使ふだらうさ、もし手に入ればね。そこが

イデオロギーの恐しさ、人間性の恐しさなんだ。」と左翼の学生が核爆弾を使用するというビジョンを述べている²⁶⁵。そしてもちろん、両者の共通点は自分の目的のために「天皇」を利用しようとしている点にもある。

ただ、三島由紀夫が「天皇」を日本文化の価値を示すものとして自身の主張に登場させるようになったのは、次節で述べるように1960年代後半になってからであり、「美しい星」を発表した頃にはそのような発想は表明されていない。最終節では結論として天皇に言及することがまだ無かった三島由紀夫の小説、その一つである「美しい星」が持っていた可能性・批評性をあらためて開いて見せたのが「ピンチランナー調書」だということを明らかにする。

5 結論・「転換」の持つ意味

「ピンチランナー調書」における「転換」については、既に様々な意味づけがされている。発表まもなくの大岡昇平による「森・父が十八歳に戻るということは、「大物A氏」への情報提供者という役目の放棄ということ」という、「森・父」（および森）が現状押しつけられている様々な役割からの解放ととらえたのを初めとして²⁶⁶、加賀乙彦により「転換後の十八歳の森・父というのは、理想の森の姿であって、二十八歳の森というのは、理想の森・父というふうに読めるんじゃないか。（略）この転換というのは、一ぺん死んだ人間が復活したわけです。（略）甦った森は二十八歳になって、森・父は弟子にふさわしい十八歳となって、復活したキリストに仕えるというような構成があるんじゃないか」というような宗教的な読み取りが行われたりしている²⁶⁷。小説中で「転換」は唐突に起り、「森・父」によってやはり唐突に「宇宙的な超越者」の仕業と意味づけられており、その意味・理由は大きな空所となっており、読者が自身の関心に従って充填できるように書かれている。今の二つの意味づけも否定する根拠はなく、妥当性もあるだろう。

ただ、小説中にはもう一つ「転換」についての意味づけが「森・父」以外の登場人物によって提示されている。本論ではそれを糸口に三島由紀夫との関係から「転換」を意味づけてみる。「転換」について語っているのは「四国の反原発のリーダー」である、小説中で「義人」と呼ばれる登場人物である。彼は「大物A氏」のような「黒幕」はただ「私利私欲」のために動いているだけなので放っておいてい

い、問題にすべきは「私利私欲のかたまりの」「てっぺんあたりから」「立ちのぼる」、[わけのわからぬ蜃気楼]、「天皇ファミリーにむけて」「抜ける」「風穴」だと語る。「私利私欲」で権力を志向するものは、「天皇ファミリー」を利用しつつ、また「天皇ファミリー」への崇拜を強化するために働くことになる。たとえば、原発の利権に集まる人々は、原発が「運転しはじめる」と「天皇ファミリー」に「視察」させ、その様子を「全日本が」「テレビの前」で「跪拝する」。

しかし、そのような「天皇ファミリー」につながる「風穴」から自由であるのが「転換」した森と「森・父」だと主張しているのである。

——しかし森・父のような人間ならば、自分自身のいまそのようにある状態から、その全体から、眼を離せませんか？ そのような限界状況の人間の眼でこの世界を見れば、それは現にいま私が見ている眺めとちがっておりますやろ？……すくなくとも、あんたの頭の上には、天皇ファミリーへむかう風穴は抜けてへんよ！ 天皇ファミリーへむかう風穴は、日本の伝統文化の諧調にしたがっている人間のものやないか？ あんたは自然の逆やねん！ これでは天皇ファミリーも処置なしや！

——確かに「転換」した森も森・父も、いわゆる自然な支配秩序に対しては、痛烈な否定の契機だねえ、と「志願仲裁人」も同調したよ。僕にはまだ、天皇ファミリーと森・父との関係については、よく「義人」のいうことがつかめなけれども。

——万世一系の天皇ファミリーに「転換」が起ると考えて見いへんか？ それこそ処置なしやんか！ そやから森・父と天皇ファミリーとはやね、ディメンションがちがうのやねん、存在のな、意味のレヴェルがちがうのやねん！ 闘争的にじゃなくいえば。(第七章 4)

引用中で「義人」と共に「森・父」の協力者である「志願仲裁人」が言うように、確かに「天皇ファミリーと森・父との関係」づけは唐突なものである。しかし、この「義人」の「天皇ファミリーに「転換」が起る」ことが「処置無し」、つまり天皇制崇拜を支える前提を無効にするというのは、三島由紀夫の天皇観と結び

つけることでよりわかりやすくなる。小説「英霊の声」（1966年）や評論「文化防衛論」（1968年）を発表する1960年代後半に入ってから、三島由紀夫は天皇に特別な意味を与え、重要視する発言を続けることになる。

すなはち、文化の全体性、再帰性、主体性が、一見雑然たる包括的なその文化概念に、見合ふだけの価値ヴェルト・アン・ジツヒ自体を見出すためには、その価値自体からの演繹によつて、日本文化のあらゆる末端の特殊事実までが推論されなければならない（略）雑多な、広汎な、包括的な文化の全体性に、正に見合ふだけの唯一の価値自体として、われわれは天皇の真姿である文化概念としての天皇に到達しなければならない。

（略）

このような文化概念としての天皇制は、文化の全体性の二要件を充たし、時間的連続性が祭祀につながると共に、空間的連続性は時には政治的無秩序をさへ容認するにいたることは、あたかも最深のエロティシズムが、一方では古来の神権政治に、他方ではアナキズムに接着するのと照応してゐる。²⁸⁾

三島由紀夫「文化防衛論」からの引用であるが、日本文化やそれを担うものとしての天皇について「全体性」を主張し、またその「全体性」を担う要素として「連続性」を強調するというのは、この著名な評論から始まり、その後も繰り返し見られるものである²⁹⁾。「時間的連続性」は「持続」と言い換えられてもいるのだが、天皇の存在が代々と代えることなく継承されてきたことが「文化」の正統性を保証するという信仰が語られている。

時間が不可逆的に流れ続け、父である先の天皇から順繰りに子孫である後の天皇へとその存在が引き継がれてきたということを根拠とするこの信仰は、「森・父」において時間が逆行し20年若返り、また親と子の年齢が「自然とは逆」になる「転換」という現象によって脅かされる。「転換」は時間や空間の「連続性」という前提を無効化するものである。

ただ、実は宇宙的な存在によって可逆的な時間が提示され、人類が信じる不可逆的な時間の価値が否定されるというのは大江健三郎以前に、実は三島由紀夫自体が

自身の小説の中で登場人物に語らせていることなのである。

人類はまだまだ時間を征服することはできない。だから人類にとつての平和や自由の観念は、時間の原理に関わりがあり、その原理によって縛られてゐる。時間の不可逆性が、人間どもの平和や自由を極度に困難にしてゐる宿命的要因なのです。

もし時間の法則が崩れて、事後が事前へ持ち込まれ、瞬間がそのまま永遠へ結びつけられるなら、人類の平和や自由は、たちどころに可能になるでせう。そのときこそ絶対の平和や自由が現前するでせうし、誰もそれを贖物くさいなどと思ふ者はをりません。（「美しい星」第九章）

これは「美しい星」の後半、羽黒たちとの討論の冒頭で大杉重一郎が語った言葉である。「事後が事前へ持ち込まれ、瞬間がそのまま永遠へ結びつけられる」可逆的な時間の運用が可能になれば人類は「平和や自由」を実現できるというイメージ、この小説の中ではそれはまだできずにいることだと語られているが、宇宙的な使命のためにそれを実現したのが「ピンチランナー調書」の森と「森・父」であると繋げることができる。

彼らによる「転換」は小説中では「天皇ファミリー」に向かう「風穴」を明けるものだと主張されている。そこから「美しい星」を見直していると、宇宙人たちが皆が全く「天皇」の存在を黙殺していることに気づく。「ピンチランナー調書」を補助線にその意味を考えてみると、不可逆な時間の中で代を重ねてきたことを権威の根拠とする天皇など、時間を可逆的に操作できる上位の存在からすれば確かに取るに足らないものである。彼らは天皇や日本の伝統についてなど一顧だにしない。彼らからすれば、地球人類は劣った人々でそので歴史も文化も特に価値はないのであり、天皇や日本文化だけを特別視するはずもない。

三島由紀夫は「美しい星」で持っていた宇宙的な存在から地球を見るという仮定で、人類の文明・文化を相対化する視点⁹⁰を「文化防衛論」では失っているように見える。「ピンチランナー調書」は1970年の三島の自決以降見えにくくなってしまった「美しい星」の可能性を「転換」というイメージで再生させた小説と読むこと

ができるのである。

さらにもう一点「ピンチランナー調書」との関連で指摘しておきたいのは、「美しい星」の宇宙人たちが人類が行った愚行として捉えているのが核爆弾の開発に限られ、当時核の平和利用として宣伝されていた原子力発電所については全く無視していることである⁹³。大杉家の人々は、「五十メガトンの核爆発実験」を行ったソビエト連邦の指導者フルシチョフに宛てて説得の手紙を送る（第二章）。そこで訴えられているのは「いはゆる偶発戦争、ボタン戦争」、つまり核戦争に世界を巻きこむことの愚かさであり、たとえば原子力発電所の事故によって人々の生命や生活が脅かされることの危険性ではない。

火星を含む宇宙人が人類と異なって「時間を征服」している、言い換えれば過去から未来を俯瞰的に把握することができるなら、彼らが警告すべきは起こることのない核戦争よりも、これから実際に繰り返し起こる原子力発電所や核処理施設での事故となるはずだろう。この点は、所詮「美しい星」の登場人物たちが自分たちを宇宙人と思いこんでいる普通の人間に過ぎないと読むことも、または実際に宇宙人だが地球人類の思考の枠に囚われて考える習慣に陥っていると読むこともできる。「美しい星」発表から半世紀以上経った現在から見るとそのような彼らの超越性の限界が見えてしまうのだが、その視野の狭さを乗り越えるべく書かれたのが「ピンチランナー調書」なのである。だからこそ、「森・父」は原子力発電所の技師だったのだし、彼が「大物A氏」に提供していた原子力関係の報告は革命党派に核爆弾を作らせるために利用されている。原子力を平和のために活用すると主張されていた発電所すら人類を脅かすものとして描かれる。そして、原子力発電所に反対し続けていた「義人」だからこそ、「大物A氏」の危険性を見抜く存在として「森・父」に同伴していたのである。

以上、本論では荒唐無稽なアイデアとされて、十分に意味づけられてこなかった「ピンチランナー調書」における「転換」を、時間を可逆的なものとしてとらえたことで可能になる現象と捉え、それを不可逆的な時間を前提とし、長い歴史の中で代々受け継がれてきたと見なされている天皇の存在を批評するものとして意味づけた。また、それは天皇に特別な価値を見出すようになる前の三島由紀夫の「美しい星」の発想を継承するものであり、かつ「文化防衛論」などに読み取れる三島由

紀夫の天皇にまつわる思想を自ら批判するものになっていることを確認した。

注

- ⁽¹⁾ 『新潮』1976年8～10月号。以降の引用は『大江健三郎小説』4（新潮社、1996年）による。
- ⁽²⁾ 『文芸』1976年12月号。
- ⁽³⁾ 月村敏之「発言—大江健三郎における事実と妄想」『すばる』1976年12月号。
- ⁽⁴⁾ 柘植光彦「読みにくさの問題」『文學界』1977年1月号。
- ⁽⁵⁾ 加賀乙彦・佐々木基一・宮原昭彦「読書鼎談」『文芸』1977年1月号。
- ⁽⁶⁾ 一條孝夫『大江健三郎 その文学世界と背景』（和泉書院、1997年）、尾崎真理子『大江健三郎全小説全解説』（講談社、2020年）など。
- ⁽⁷⁾ 後述する大岡昇平の対談での発言、山本昭宏『大江健三郎とその時代 「戦後」に選ばれた小説家』（人文書院、2019年）など。私自身も「大江健三郎と原子力、そして天皇制」（『述5 反原発問題』、論創社、2012年、<http://kuwabara.a.la9.jp/study/pdf/genshiryoku.pdf> で公開）で「平和利用」のための原発こそが核兵器を生み出している」グロテスクな状況を描いていることを指摘している。
- ⁽⁸⁾ 杉山若菜^{エナンテオドロミー}「『相互反転』した『救世主は従って光をもたらす人なのである』—『ピンチランナー調書』考察」『日本文学研究』56、2017年。
- ⁽⁹⁾ 『新潮』1962年1～11月号。以降の引用は『決定版三島由紀夫全集』10（新潮社、2001年）による。
- ⁽¹⁰⁾ 「文学者とは（3）」『群像』1958年11月号（1958年9月16日収録）。
- ⁽¹¹⁾ 三島由紀夫・大江健三郎「現代作家はかく考える」『群像』1964年9月号（1964年7月13日収録）
- ⁽¹²⁾ 三島由紀夫「すばらしい技倆、しかし……—大江健三郎氏の書下ろし「個人的な体験」」『週刊読書人』1964年9月14日。以降の引用は『決定版三島由紀夫全集』33（新潮社、2003年）による。
- ⁽¹³⁾ 大江健三郎「もうひとつの『個人的な体験』」『文芸』1965年2月号や江藤淳との対談「現代の文学者と社会」『群像』1965年3月号（1965年1月11日収録）
- ⁽¹⁴⁾ 「シンガポールの水泳」『群像』1971年2月号。引用は『持続する志』（新潮社、1972年）

による。

- ¹⁵⁾ 「状況と文学的想像力」『図書』1971年12月号。引用は『持続する志』（前出）による。
- ¹⁶⁾ 笠井潔『物語のウロボロス』筑摩書房、1988年、「序章 物語あるいは自壊する形式——大江健三郎——」。
- ¹⁷⁾ 「落ちる、落ちる、叫びながら……」『文藝春秋』1983年1月号。
- ¹⁸⁾ 「蚤の幽霊」『新潮』1983年1月号。引用されている評論は「政治死の生首と「生命の樹」」『叢書 文化の現在12 仕掛けとしての政治』岩波書店、1981年。
- ¹⁹⁾ この点は「大江健三郎と自衛隊、その持続性」（『述6 3・11 後から見た戦後思想』論創社、2013年、<http://kuwabara.a.la9.jp/study/pdf/ooejieitai.pdf> で公開）で論じた。
- ²⁰⁾ 大岡昇平・大江健三郎「文学は現代をどうとらえるか」『新潮』1976年12月号
- ²¹⁾ 三島由紀夫と大江健三郎が核戦争の可能性のある世界情勢についての認識を共有していたことについては、既に梶尾文武（「三島由紀夫『美しい星』論——核時代の想像力」『日本近代文学』81、2009年）による指摘がある。
- ²²⁾ 山本昭宏『大江健三郎とその時代』（前出）。
- ²³⁾ 「大江健三郎と自衛隊、その持続性」（前出）。
- ²⁴⁾ 三島由紀夫「すばらしい技倆、しかし……」（前出）。
- ²⁵⁾ 「東大を動物園にしろ」『文藝春秋』1969年1月。引用は『決定版三島由紀夫全集』35（新潮社、2003年）による。
- ²⁶⁾ 大岡昇平・大江健三郎「文学は現代をどうとらえるか」（前出）。
- ²⁷⁾ 加賀乙彦・佐々木基一・宮原昭彦「読書鼎談」（前出）における加賀乙彦の発言。
- ²⁸⁾ 三島由紀夫「文化防衛論」『中央公論』1968年7月号。引用は『決定版三島由紀夫全集』35（新潮社、2003年）による。
- ²⁹⁾ 「栄誉の絆でつなげ菊と刀」『日本及日本人』1968年9-10月。「私の自主防衛論」『日経連タイムズ』1968年10月31日。「反革命宣言」『論争ジャーナル』1969年2月。『討論 三島由紀夫 vs. 東大全共闘《美と共同体と東大闘争》』新潮社、1969年6月20日など。
- ³⁰⁾ なお、山崎義光（「二重化のナラティブ——三島由紀夫『美しい星』と一九六〇年代の状況論——」『昭和文学研究』43、2001年）や梶尾文武（「三島由紀夫『美しい星』論——核時代の想像力」前出）などで既に影響関係が指摘されているアーサー・C・クラーク「幼年期の終り Childhood's End」（1952）は、この人類の上位存在を設定する発想について影

響していると考えられる。

³¹⁾ 戦後の日本において天皇と原子力発電所とがどのように平和という名目で利用されていたかについては、既に「大江健三郎と原子力、そして天皇制」（前出）で論じた。